

*** 外国人の見た明治の日本

ここに紹介するのは『日本奥地紀行』（イサベラ・バード著 高梨健吉訳 平凡社刊）、原題は「Unbeaten Tracks in Japan (日本の未開の地)」(Isabella Lucy Bird, 1831.10.15～1904.10.07 (73))である。

本書は、明治 11 (1878) 年 6 月から 9 月にかけて著者 (当時 46 歳) が日本人通訳一人 (伊藤) を帯同して敢行した、東京から北海道間 1,400 マイル (2,200km) の旅行の記録であり、著者が妹 (ヘニー) へ送った手紙をもとにして書かれている。おおよそその旅程は (アメリカ～横浜～) 東京～日光～新潟～米沢～秋田～函館～室蘭～日高である。著者は、はしがきで、「西欧の影響を少しも受けていない地方に滞在し、日本の生活様式に触れたことがらや自然の様子を、日本の現状に関する知識を少しでも増進するのに役立てたいと思って書いたものである。」としている。そのため、東北・北海道にかけての旅程のほとんどは、「これまでひとりのヨーロッパ人も踏破したことのないコース」を選んだ。また、本書は「日本研究書ではなく、単に日本旅行記にすぎないものである。」としているが、その地理、地質、生物 (特に植物)、人間の精神文化や健康等に関する記述は、専門家の観察眼によるものといってよいほどである。

さて、著者は、因習にとらわれない自由闊達な女性である一面を発揮し、勇気と知的好奇心に裏付けられた大胆不敵な冒険心と異常なまでの忍耐力をもって精力的に旅を続けるのである。そして、特に、新政府が建設しようとしている新文明の主要な材料とすべき農村の真の姿を描こうとしている。

時代は、前年の明治 10 (1877) 年には、「年じゅう治まるめい」と年号を逆さ読みした駄洒落にもされた西南の役があるなど、明治維新の混乱も収まっていない頃で、農民は全国至る所で困窮し、農民一揆は幕末を上回って平均年 40 件を数えていたとされる。このような農民にとって暗黒時代ともいうべき時代に、著者は、美しい自然のなかにひそむ貧しい農村をつぶさに観察した。さらに、北海道 (エゾ) にわたって白老や平取に留まり、それぞれから海と山のアイヌの民俗を詳述した。

これらには文明開化から遠く離れた農村の姿がある。そして、そこには、以下のような日本人・日本人社会の素晴らしい側面が描き出されている。

日本人社会の安全性は、「日本の中を旅行するのは絶対に安全だということをだいぶ前からよく理解していた。」(第 31 信) と旅の途中で確信し、その例を「ヨーロッパの多くの国々や、わがイギリスでも地方によっては、外国の服装をした女性の一人旅は、実際の危害を受けるまではゆかなくとも、無礼や侮辱の仕打ちにあったり、お金をゆすり取られるのであるが、ここでは私は、一度も失礼な目にあったこともなければ、真に過当な料金をとられた例もない。」「群衆にとり囲まれても、失礼なことをされることはない。」(以上、第 13 信) と体験を記している。また、日本人の親切で誠実、正直な様子を、「馬子は、私が雨に濡れたり、びっくり驚くことのないように絶えず気をつかい、革帯や結んで

いない品物が旅の終わるまで無事であるように、細心の注意を払う。」「骨折賃として何銭かあげようとしたが、彼(馬子)は、旅の終りまで無事届けるのが当然の責任だ、と言って、どうしてもお金を受けとらなかった。」(以上、第 13 信)ことなどに見出して、日本人は「お互いに親切であり、礼儀正しい。それは見てもたいへん気持ちがよい。」(第 13 信)と礼儀正しく遠慮深い国民性を好ましいものと感じている。

当時の“奥地”の実態は、「彼らは苦しみ、烈しい労働をしているけれども、まったく独立独歩の人間である。私は(谷間に孤立した村落で赤貧と変わらぬ悲惨な生活状態にある)このふしぎな地方で、一人も乞食に出会ったことがない。」(第 17 信)というほど悲惨なものであり、著者が描いた日本は過渡期の日本であるが、しかし、そこに表れた日本人の真の姿は百年の年月を経た今もお脈々と生き続けている。

また、その後、北海道に渡った著者は、アイヌを、「文明化できない人たちであり、まったくどうにもできない未開人である。」(第 37 信)が、「魅力的で、私の心を強く惹きつけるものがある。」と捉え、「東洋の未開人(アイヌ)と西洋の文明人(著者)がこの小屋で相対している。しかも未開人が教え、文明人が教わっている。」状況のなかで、「これらの素朴な未開人たちは子どもたちである。子どもとして判断せねばならぬ。」(以上、第 36 信)と、素朴に観察している。

「彼ら(アイヌ)が取引において決して不正をしないことがわかった。」「このような(一軒の家が焼け落ちた)場合には、村の男たちが総出でその家を建て直すのが「ならわし」である。」(以上、第 36 信(続き))など、「全体的に見るならば、アイヌ人は純潔であり、他人に対して親切であり、正直で崇敬の念が厚く、老人に対して思いやりがある。」(第 37 信)と知った著者は、そのアイヌから、「言葉は国によって異なり、人びとの意志疎通は難しいが、有難いことに親切心と礼儀正しさは世界中どこでも通ずる言葉である！」(第 39 信(続き))と感銘するほどの接遇を受けたのである。

“奥地”として描かれた東北人や北海道のアイヌの姿は、親切、礼儀正しい、遠慮深い、安全であるなど、日本社会と日本人本来の姿を正しく示しているといえる。これを好ましいものと感じていた著者は 17 年後の明治 28(1895)年に再び来日しているのである。

20120220 MS生

